

高校の生徒・進路指導におけるアイデンティティ概念に関する誤った教育とその弊害

大野 久

1. はじめに

教職課程の「生徒・進路指導の理論と方法」や現代心理学部の専門科目である「青年心理学」において、アイデンティティ概念を講義すると学生からの質問、相談が殺到する。これは高校教育において受けたアイデンティティ概念の説明と、専門的な心理学の講義の内容がずいぶん違うこと、さらに、高校で説明されたアイデンティティ概念と高校の生徒自身の生き方を重ね合わせた場合、非常に多くの混乱と悩みを招いていることがその原因にある。本稿では高校の生徒・進路指導におけるアイデンティティ概念の誤用とそれによる弊害、さらには正しいアイデンティティ概念と望ましい生徒・進路指導について考察する。

2. 学生の進路選択に関する混乱

講義後の学生からの相談や講義に関するリアクションペーパーに現れた学生たちのアイデンティティ概念に関する混乱の典型的なものを以下にいくつか挙げる。これらはすべて筆者が実際に学生達から受けた質問、もしくはリアクションペーパーの内容である。

エピソード①：学生「高校時代、散々『本当にして自分のしたいことを見つけろ、自信の持てる人生を探せ』とか言われましたが、いくら考えても全くわかりません。」

エピソード②：学生「高校で本当にしたいこ

とを見つけて就職しようと指導されました。そこで『本当にしたい事はロックミュージシャンになりたいということです』と答えると、教員や親から『それはダメだ』と言われました。本当にしたいことをロックミュージシャンなのにそれを否定されたら本当にしたいことを見つけて就職するという指導と矛盾しているのではないですか。」

エピソード③：学生「本当にしたい事では無いのですが、先日企業から内定をもらいました。でも本当にしたいことでなければ就職してはいけませんよね。」筆者「(最初に聞いたとき質問の意味がすぐにはわからなかったので、繰り返し質問を聞いた後)君は本当にしたいことでなければ就職してはいけないと考えているんだね。昔は『働かざるもの食うべからず』と言って、仕事の好き嫌いは二の次で、とにかく働くことが重要だったんだよ。」学生「そうですね。大変安心しました。」

エピソード④：学生「昔から漫画家になろうと思って5年間漫画を描き続けています。しかし最近、自分よりも上手な人は1万人もいると分かってきました。私としてはもう漫画家は諦めようかなと思っているんですが、親や先生が『本当にしたいことを見つけたんだから、やめずに頑張れ』と言われ、やめることもできません。」

エピソード⑤：学生「高校時代、『青年期は

自分探しが大事だ』と言われたので、大学入学後、1年間東南アジアを旅してきました。東南アジアの事情は少しわかったつもりですが、『自分』は見つかりませんでした。』

エピソード⑥：学生「ロックミュージシャンになりたいんですけども、周りの反対を押し切るほどの自信也没有。どうしたらいいでしょう。」筆者「君はプロのミュージシャンでやっていける自信と実力はあるの？」学生「残念ながらその実力はないと思います。」

筆者「では諦める？」学生「諦めたくありません。」筆者「では別の就職をしてお金を稼いで週末はロックの演奏活動するというのはどう？」学生「先生、そんなのありますか？今までそんなこと誰も教えてくれませんでした。」

エピソード⑦：学生「最近、～と言う企業から内定をもらいました。これで良いと言ってください。」筆者「その企業のことよく知らないし、そもそもあなたの人生に私は責任が持てない。何を私に求めているの？」学生「先生にこれで良いと太鼓判をして欲しいのです。」

エピソード⑧：(文系)学生「適性検査を受けたら、理科系と出たのですが、理科系で就職しなければいけないのですか」

3. 高校教育におけるアイデンティティ概念に関する誤った教育と青年の混乱

上述の学生たちの混乱の背景を考えてみよう。その背景には次のような学生たちの思い込みがあるように考えられる。

- ①青年期には、アイデンティティ(本当にしたい事、自分らしさ)を見つけなければいけない。
- ②就職に関しては本当に自分のしたいことを見

つけて就職するべきである。もしくは、しなくてはいけない。

- ③いったん決めた就職、進路は変えてはいけない。

さらに、こうした思い込みに対する青年たちの混乱は、以下のようなものである。

- ④本当にしたいことを見つけなければ就職できない。

- ⑤本当にしたいことは、現時点では見つからない。

- ⑥本当のしたいことは、建前では、青年の意志と言われるのに、本音の部分では親や教師の期待、社会的望ましが強く働いている。

- ⑦自分の本当にしたい事では、食べていけない。

こうした進路に関する問題を高校でどのように説明を受けたか、こうした問題の鍵概念として扱われている「アイデンティティ」概念に関する簡単なアンケート調査を行った。対象の学生は東京都内の4年制大学、教職課程を受講する80名の学生である。学生の9割が高校時代に「アイデンティティ」という言葉を学んでおり、その機会としては国語、英語、倫理、現代社会、公民、家庭科、保健体育の授業、特別活動の進路指導、校長の講演などであった。予想に反して、進路指導以外の教科の中で扱われることが多かった。さらにその内容は、その多くが、「個性」、「自分らしさ」と教えられており、それ以外では、「同一性」、「自己分析をするという認識」、「自分にしかない長所」、「人生計画」、「人生設計」、「自分であるという証明」、「一人一人が持っている自分を表すもの」、「独自性」、「自分のなりたい自分」、「自分の進みたい道を見つけ自信をもち応援してもらうこと」などで

あった。加えて、そのほとんどで「内容が曖昧」、「説明不足」、「よくわからなかった」などの感想が続いた。総合すると、高校教育の中でアイデンティティは、さまざまな機会をとらえて高校の生徒たちに教育されており、その内容は一義的でなく多様であり、かつ生徒たちはその内容を明確に理解していないことが分かった。その一方で、指導の中でエリクソンがアイデンティティを青年期の主題としたことを引き合いに出し、「自分の本当に好きなことを見つけて就職しなさい」という論理に結びつけていると考えられる。しかし、本当に「自分らしさ」や「自分の本当に好きな事」がアイデンティティであり、青年期にはそれを「見つけなければならず」、「その内容に合った就職しなければならない」のであろうか。

4. 本来のアイデンティティ概念

本来のアイデンティティ概念とはどのようなものであるか。エリクソンは、アイデンティティそのものを定義していない。その著書の多くでは、アイデンティティの感覚 (a sense of identity) を定義している。つまり、アイデンティティを持っていると感じる感覚、感じである。その代表的なものは、「内的な不変性と連続性を維持する各個人の能力 (心理学的意味での自我) が他者に対する自己の意味の不変性と連続性に合致する経験から生まれた自信」(Erikson, E.H. 1959) である。

この定義について大野 (2010a) は、以下のように解説している。この文章を見ると、「内的な不変性と連続性を維持する各個人の能力 (心理学的意味での自我)」が主語であり、それ

が「他者に対する自己の意味の不変性と連続性」と「合致する経験」があり、その経験が「自信」を生み、その「自信」が「アイデンティティの感覚」である。

次に、この定義の中の「不変性」と「連続性」という概念について考えよう。「不変性」の原語は sameness であり、「斉一性」と訳す方がより原意に近いという議論もある。不変性とは「自分はまとまりを持った一個の人間であり、自分は一人で他に同じ人間は存在しない」という認識である。この認識は、健全な人間であればだれでも自明に持っており、疑うことはない。しかし、病的には、この不変性が崩れる現象も存在する。たとえば、解離性同一性障害 (多重人格障害) は、「私はまとまりを持った一人の人間」という不変性の感覚が崩れた例である。また、「連続性」の原語は continuity である。「過去の私も、現在の私も、未来の私も同じ私である」という認識である。この認識も「不変性」と同様、健全者にとっては自明である。しかし、病理において記憶喪失は本人の認識において、連続性が崩れてしまった例といえる。

次に「内的な」と「他者に対する自己の意味」について考えよう。定義の中で、合致するものは前半の「不変性と連続性を維持する各個人の能力」と後半の「不変性と連続性」なのであるが、前半を修飾する言葉は「内的な」であり、後半を修飾する言葉は「他者に対する自己の意味」である。

「内的な」とは、「主観的な」と同義であり、話さなければ他者には伝わらない個人的認識である。例えば「私は昔から芸術家を目指して生きている」などである。これに対して「他者に

対する自己の意味」とは、その人物が生きている意味の世界である全生活空間における「他者」に対する自己の存在の意味である。ここでいう他者とは、時として日常的具体的な人間関係と、それを越えた業界とか、学界、社会、世界のような観念的な対象をも含み込んだ他者である。つまり、アイデンティティの感覚とは、「社会の中で～としての自分(たとえば芸術家)は、他の誰とも違う自分であって自分は1人しかいない、かつ過去の私も現在の私も将来の私も私自身であるという感覚と、その役割をとっている私を囲んでいる他者(芸術家に対しては、それを鑑賞する大衆、ファン、芸術仲間、芸術に関する業界、批評家、地域社会)などから、あの人物は他の誰とも違う人物であって、あの人物は1人しかいない、かつ過去も現在も将来もあの人物は同じ人物であろうと思われるであろうという感覚が合致していることによる自信」ということになる。しかしこの説明はあまりにも抽象的なので、日常生活の中でのアイデンティティの感覚にあたるものを考えると、たとえば教師になって、1,2年は自信がないもの3年から5年すると、相対的に授業も安定してできるようになり、生徒からの相談にも的確に回答できるようになる。初任時よりは生徒、同僚、上司からの肯定的な評価を受ける可能性も高くなり、「生徒から教師として認められるようになった」、「職場で一目置かれるようになった」、「重要な仕事を任せられるようになった」といった感覚がアイデンティティの感覚に最も近いように思われる。

こうした状況から、大野(1995,2010a,2010b)は、アイデンティティの感覚を社会の中で～と

しての「自覚、自信、自尊心、責任感、使命感、生きがい感」の総称であると解説した。

ちなみにアイデンティティの原語はidentityであるが、当初、訳語として「同一性」、「主体性」、「存在証明」などが当てられていたが、原語の内容を十分に表現できる訳語がなかったため、現状ではアイデンティティとカタカナ表記することが多い。

5. 本来のアイデンティティ概念と学生たちの感覚のズレ

本来のアイデンティティ概念について検討すると、それは3年から5年の社会経験を経て、周りからその役割を十分に果たしていることについて認められるという意味内容が強く、社会の経験がない高校生の「したいこと」とはだいぶ異なっていることがわかる。

したがって、学生になってからの「したい事で本当に社会でやっていけるかどうか分かりません」、「したい事で食べていける自信がありません」、「経験がないので自信がありません」などの感想は、本来のアイデンティティ概念に照らしてみても的を射ている。

さらに、多くの学生が考えている「アイデンティティを見つける事は青年期の課題である」という命題も正確では無い。エリクソンは、漸成発達理論において各発達段階の主題(theme)を示したが、それは課題(task)では無い。発達課題とするとそれをクリアしなければ次の段階にいけないというニュアンスが強いが、エリクソンは人格発達のその発達段階において最も明確に現れる主題とした。青年期以前ではこれを主観的認識することは多くないが、青年期

以降ではこの主題は、人間の最大関心事として現れる。青年期では自分がこの人生をどのように生きていくか(アイデンティティ)が最も「気になる」重要な関心事となる。就職できるか否か、こうした問題に答えが見つけれられるか否かの正否が問題なのではなくこうした問題に関心が向くということを示した。したがって、日常生活の中では単に「青年期はこうした問題に悩む」という内容を示したのであり、必ず答えを見つけないならぬという内容ではない。このことから、青年期まっただ中の青年たちが「将来のアイデンティティを見つけれられないので困る、焦る」と表現することが多いが、困ったり焦る必要はなく、むしろ、この時期は悩むものという指摘が心理学的には正しいことになる。

6. 青年の指導に対する望ましい対応

こうしたことを考慮した上で、高校生、大学生の進路選択に対する望ましいアドバイスを考えてみよう。

①健康に悩むこと：「危機」

エリクソンが示した通り、青年期の最大関心事は自分がこれからの人生をどのように生きていくかを考えることである。青年期以前は、生活に関する決定事項をほとんどの場合親が決めるので、子供たちが自分の意志で物事を決める機会は多くない。また、成人になってしまうと、その社会的役割とそれに伴う責任から簡単に人生をやり直すことができない。こうしたことから青年期は自分で自分の人生を決めることのできる最初で最後の機会ということができる。この時期に決めなければならない事は、進路、就

職、跡取り問題、結婚などなど多数ある。さらにこうした事は理想的には30歳前後までに決まっていることが望ましいであろう。したがって、高校生年齢から30歳前後まで約10数年間の間に人生に関する主要な決定をしていかなければならない。こうしたことからそうした選択の始まる高校生、大学生では迷ったり悩んだりすることが当然である。エリクソンはこのように迷ったり悩んだりする時期を「危機」と呼んだ。むしろ逆に、この時期に何も悩みがないという事の方が主体的な人生を歩むという意味では問題があろう。つまり、青年期において人生に関する悩みを持つことの方が心理学的には健康であり、必然である。さらに、悩んで決めるということが主体的な人生に必要であることを考えると、青年期に悩む事は心理学的には健康なことであり、高校生、大学生には「この時期に悩む事は必然、健康に悩む」ことをアドバイスすることが、人格心理学的な知見と合致する。ちなみにこうした内容を講義すると、学生達から「今は悩んでよい時期なんですね。私は自分が悩んでいることに悩んでしまっていたが、講義を聞いて大変安心しました」という感想をもらうことも少なくない。

②将来の人生を試すこと：「役割実験」

エリクソンは、アイデンティティを選択する際に必要なプロセスとして①で述べた「危機」と「役割実験」を挙げている。もう片方の「役割実験」とは、自分が将来社会の中でとるであろう役割を実際に試してみることである。この役割実験によって現実的な自分の適性、役割のやりがいなどを通してその選択が自分にとってよりよいものであるか見極めるために行う。

教職に関して考えると「教育実習」がその典型的なものといえる。教育実習の中で仮に先生の役割をとり、その職務内容、責任、やりがい等を実感する。ある青年は事前の想像以上に自分の適性に対する自信ややりがいを感じ、より積極的にその職に就くことを望むようになるであろうし、別の青年はその仕事の大変さ、自分の適性、自分にとってやりがいを感じられないことなどからその進路をあきらめることもあるであろう。このように役割実験の結果、進路変更することも重要なプロセスであり、決して無駄な事では無い。この役割実験なしに進路選択した結果、自分に適性がないこと、やりがいがないことを就職した後に気が付き、進路選択をやり直すとする、それにかかるエネルギーや周囲の迷惑などを考えると、早い段階での方向転換がよりよいことになる。

高校での進路指導の中で、「よく考えて自分のしたいことを探しなさい」という指導により、高校生が時として役割実験することなく、「私は音楽が好きです。半年も練習すればきっとプロになれると思います。」などの意見を述べることもあるが、こうした現象は、アイデンティティ概念の誤った理解による安易な指導とその安易な思い込みである。こうした意見を持つ高校生に対しては、実際に音楽の活動しているのか、また他者(聴衆、他の音楽家、音楽業界)からの評価を受けるつもりがあるのかなどを確認する必要がある。

③スタートラインに立つ事：選択

青年期には迷うこと悩むことも必要であり、実際に試すことも必要であるが、役割実験とはいえ、ある進路選択に向かって活動を始めるた

めにはある種の選択が必要になる。例えば、教員を目指す場合、その手段としては教育学部、もしくは教職課程のある大学に入学して教員免許に必要な単位取得を行わなければならない。他の職業でも看護師を目指すには看護学校に入学するように、ある専門性を持ったライフコースを選択しなければならないであろう。その際に、いくつかのライフコースを重複して選択することは困難である。具体的には教育学部に所属しながら看護学校に通うことは出来ない。したがって、あるライフコースを諦め1つのライフコースを選択するというプロセスが必要になる。ここで青年にとって問題になるのは、そのライフコースの選択が自分にとってよりよいものであるかどうかという判断である。皮肉なことに、このことはその養成システムに入って実際に経験してみないとわからないことである。さらにはその先にある職業が自分にとって良い物であるかどうかは知るすべもない。したがって、この時期の青年に出来る事は、「とりあえず始めてみる事」であり、なぜなら「やってみなければわからない」からである。さらには「始めてみないことには始まらない」のであるから、この意味でこの時期には「将来の進路のためのスタートラインに立って、まず始めてみる事」が重要なのである。さらに言うと、役割実験のところでも述べたが、そのライフコースが自分にとってよりよい物では無いということに気がついた場合は、進路変更しやり直すこともあり得るのである。

7. 「キャリア」概念と「夢」概念

近年の高校教育、大学教育の中で高校生、大

学生の就職を支援する教育の中で「キャリア」という単語が頻繁に使われている。生涯を見通してのキャリア形成の必要性という意味では正しい教育の方向性ではあるが、学生たちの受け取り方の中には、自分のキャリアという確固たる実体があり、それを探し当てるのがキャリア教育の目的であると誤解している者たちもいる。ここまで論じてきたように、真の意味でのキャリア形成は、確固たるものはない未来に対する試行錯誤の連続である。しかし学生たちの中には確固たる実体があるように誤解し、繰り返される適性検査の中で、すでに紹介したエピソードの（文系）学生の「適性検査を受けたら、理科系と出たのですが、理科系で就職しなければいけないのですか」といった考えを持つものもある。

これに対して、キャリアという単語が導入される以前の我が国では、将来の希望に関して「夢」という概念が用いられてきた。夢は、将来教員になりたいなどの具体的、かつ現実的な職業に関するものもあるが、芸能界でデビューしたい、サッカー選手として世界で有名なプレイヤーになりたいなど、現実的かどうか疑われるもの、さらには世界一周、大会で優勝したいなど、生涯を通しての将来展望に結びつくものではなく、人生の中でのあるイベントを目標として掲げるものも含まれる。ここで語られるものは、現実的な実現可能性ということよりもそれに向かって頑張るあくまで目標という意味合いが強い。したがって、「それは現実的か」という問いに対して明確に肯定できるかどうかというハードルは、キャリアという概念に比較してはるかに低い。このことから夢概念はキャリ

ア概念よりもはるかに柔軟であり、自由に将来を語るができる文字どおり夢にあふれた概念なのである。以上の考察から、高校生、大学生に誤解を与えている可能性がある現場のキャリア概念よりも、夢概念の方が青年の成長に対して肯定的に機能すると考えている。

8. 「夢」概念から考えた生徒・進路指導の可能性

「夢」概念を用いて生徒・進路指導をした場合、指導のシミュレーション行ってみよう。

具体的には、高校生、大学生に対して「将来に対して大きな夢を持ちなさい」、「夢を持つ事は良い事です」、「それを実現するために頑張りましょう」というメッセージを発信する。それに伴って、高校生、大学生が考える方向性と、その結果としては、主に以下の5つの可能性が考えられるだろう。そのそれぞれの場合について検討していこう。

①夢を追求し、実現させた。

少数の成功者のパターンである。これは理想的な状況であり、祝福される場合である。

②夢を追求したが、実現できなかった。

大きな目標を掲げた場合、こうした状況は十分に考えられる。キャリアという概念では明らかに失敗であるが、「夢」概念では、「努力した結果だから仕方がない。しょせん夢は夢」という慰め方が成立する。これは夢概念が実現可能性よりも夢や目標であり、目標を追求する努力が評価されるという考え方による。

③夢を追求するため、生活のための別の職業を持つ。

近年のキャリア教育を受けてきた高校生、大

学生には想像できない選択肢である。職業はあくまでアイデンティティと一致するものであるべきであり、アイデンティティと一致しない職業に就く事は、避けるべき事であると教育されている。しかし現実を見た場合、俵万智、森村誠一、新田次郎などの文学者たちが、執筆だけで生計を立てることができるまでの間、それぞれ高校教師、ホテル勤務、気象庁勤務を経験してきていることは周知の事実である。したがって、自分の夢を実現する際にその夢では生計が立てられないという事はよくあることであろうし、さらには、生涯生計が立てられないということもありうるだろう。したがって生活のために別の職業を持つ事は、倫理的、道徳的、教育的にも否定されるものでは無い。むしろ自分の夢を生涯追求する姿勢の方が評価されるべきであろう。

④ 状況を検討し夢を追求することを断念して、現実的な就職をする。

学生達のレポートの中にも、酒造業の跡取り息子が将来について自分の本来の希望と、あとを継いでほしいという周辺からの期待の間で苦悩した結果、酒造業の後継者を選んだというものもある。この選択はここまでの青年の主体性を重視した方が良いという論旨とは相容れないものに見えるが、一方で心理社会的に自分の役割について十分な検討を行い、「主体的」に人生を選択したという意味から評価されるものである。しかし我が国の現実的な青年たちを取り巻く環境からの、青年本人の「主体性」を曲げてまで、夢を追求することを断念させ現実的な就職をさせようとする圧力が強すぎるように感じている。

⑤ 生計が立てられなくても夢を追求し続ける。

画家ゴッホは、聖職者の親の元に生まれ一時は聖職者を目指したが、それに挫折したあと画家を目指した。両親との関係が悪くなり家を出た後も絵画では生計が立てられず、弟テオからの経済的援助を受けながら絵画を描き続けた。存命中に売れた絵画は、1、2枚と伝えられ、絵画で生計を立てられなかった。正確に言えばゴッホは職業画家ではなかったことになる。ゴッホの死後140年たった現在、ゴッホの芸術性は周知のことであるが、ゴッホと同じ状況の青年が現在生きていたとすると、その人物に対する職業指導、生活指導は興味深い命題となる。我々は140年後の評価を知っているのでその人物の芸術活動をやめさせようとする事はありえない。しかし現状では一部の芸術仲間からの評価はあるものの、社会からの評価は全くなく、芸術活動で収入を得ることができない。このような状況では芸術活動をやめるよう指導し、一般的な就職を勧めることは多いにあり得ることである。しかし、そのことはゴッホのような大芸術家に芸術を止めさせる可能性も少なからずあるのである。

ここでゴッホが芸術を止めなかった根拠としては、「金のためには仕事をしない芸術家アイデンティティ」である事は想像に難しくなく、最終的な決断は本人の主体性によるものである。したがって、現状の教育においても指導者にその領域の専門的知識がない場合、将来の未知の可能性の有無を判断できず、軽々に高校生、大学生の進路に対する「夢」を否定することは望ましくなく、人類全体への貢献という観点から言うと危険でさえある。

以上のように考察すると、「夢」概念を用いるとどのような場合でもその可能性は否定できず、指導者はその夢を応援することが最も良い支援になるであろう。指導する立場の人間はその青年の人生に対して最終的な責任を取ることができず、その青年の人生の評価、責任は本人によるもの以外にはありえない。

ここでサッカーワールドカップ後の2010年本田選手が母校星陵高校での講演の中で後輩に向けた言葉を紹介したい。「ワールドカップは負けて帰ってきたのであまり話すことはないのですが、皆さんにいいたいことは、大きな夢を持ってくださいということです。夢を追いかけてようとすると、いろいろな壁にぶつかります。親に反対されたり、友達に笑われたり、先生に怒られたり。でも夢をあきらめないでそれに向かってがんばり続けてください。」

ナカニシヤ出版 pp61-72.

大野 久 2010b エピソードでつかむ青年心理学 ミネルヴァ書房

引用文献

Erikson, E.H. 1959 Identity and life cycle : Selected papers. In Psychological Issues. Vol.1. New York, International Universities Press.

[エリクソン 2011 アイデンティティとライフサイクル 西平直訳、誠信書房]

大野 久 1995 青年期の自己意識と生き方 落合良行、楠見孝編 講座生涯発達心理学 4巻 自己への問い直し：青年期 第4章 Pp.89-123.

大野 久 2010a アイデンティティ・親密性・世代性：青年期から成人期へ 岡本祐子（編著）成人発達臨床心理学ハンドブック 一個と関係性からライフサイクルを見る